

此方案を実施すれば、金銀の價值が低落しつゝある際に、本位貨幣の濫造を豫防することが出来るから、物價の暴騰を防ぐことを得る。又、金銀の産額が比較的に減退し、其の價值が騰貴しつゝあるときには、鑄貨料を引下げ本位貨幣の鑄造を刺戟し、以て物價の下落を未然に防ぐことが出来るから、物價の安定を計れる。唯金銀の價值が或る一定の程度を超へて騰貴した際には、金銀が鎔解される虞れありと云はざるを得無い。況して金銀貨鑄造の獎勵は一層困難であらねばならぬ。尤も政府は金銀の價值が低位を維持してゐた當時に徴收した鑄貨料を積立置き、市價の騰貴した際に此貯藏金銀を以て政府自ら本位貨幣を鑄造發行するを防げない。然しながら、其の效力も大なるもので無いのは明かなとである。

(六) 不換紙幣制。此制度の骨子は金銀の本位貨幣を總て廢止するのみならず、金銀の孰れとも引換を行はざる紙幣を發行し、物價の騰落に従ひて、其流通高を調節するとに外ならない。即ち物價指數が物價の騰貴を示したる場合には流通を收縮し、又物價が下落の徵候を呈したならば、其の程度に應じて紙幣を増發するのである。勿論此制度を實行すれば、物價の安定を保つことが出来る。然しながら此

制度を永く維持するは絶體に不可能では無いが、頗る困難である。何故となれば、兌換の必要の無き紙幣は殆んど常に濫發されるからである。尤も普佛戦争の當時、佛蘭西の中央銀行券の兌換は停止されたが、濫發はされなかつた。然しながら、他の大戦争中に於ては何れの國に於ても銀行券又は政府紙幣は兌換が停止せられると同時に濫發せられた。歐洲交戦國、殊に戰敗國に於ける不換紙幣の状態は目も當てられない。物價も亦略ぼ通貨の膨脹率に比例して騰貴してゐる。理論的には不換紙幣本位制度程單純で且つ經濟的の貨幣制度はないのであるが、濫用され易きが其の最大缺點である。従つて安全なる物價調節策であると云ふことを得ない。此制度を採用したならば、十中八九までは物價を却つて騰貴せしむるの結果を呈するであらうと思はれる。

(七) 兌換券制。此制度は不換紙幣本位制と同じく金銀の孰れをも本位貨幣として用ゐず、單に紙幣のみ通貨として流通せしむるのであるが、兌換券制は紙幣をば金の輸納に對して發行し、且つ金との引換を行ふの點に於て不換紙幣制と大に異なつてゐる。即ち我國の貨幣制度に當嵌めて之を説明するとすれば、純金一匁

を政府に納める者に對しては五圓の紙幣を發行し、又五圓紙幣を提出して引換を請求する者あるときには、純金一匁を交附するのである。尤も是れは此制度の全體ではない。此制度の眼目とする所は金の納入及び引換の率をば物價の騰落率に比例して變更するに存してゐる。假りに一般物價が平均百分の一丈け騰貴すれば、少くとも物價指數が其騰貴率を示したとするならば、五圓の紙幣を受取らんと欲する者は純金一匁でなくして、一匁〇一厘を政府に納めなければならぬ。又五圓の紙幣の引換を請求する者は矢張り一匁〇一厘の純金を受領するとが出来るのである。此制度を實行すれば金の産額が激増して、其の價値が暴落しても、物價は金本位制の下に於けるが如く暴騰しないのは勿論、其騰貴を輕微の率に喰止め得る。そは何故であるか。假りに金の産額が頓みに増加して、其の價値が半減したとするならば、金の自由鑄造を許す金本位國に於ける通貨の購買力も亦半減するに相違ない。換言すれば、物價は従前の二倍に騰貴する。然るに兌換券制度の下に於ては金の價値の縮少が少しにても物價に反照されるや否や、其物價騰貴の率に準じて金紙の交換率を引上げるのであるから、騰貴の趨勢が挫折される。

金貨國に於て物價が騰貴するのは、金の價値が低落せるにも拘らず、金貨の重量が一定不變であるからである。例へば、市場に於ける金の價値が半減せるにも拘らず、我國の十圓金貨は依然として純金約二匁を有するに過ぎない。然し假りに歐米の金貨國に於ける物價が従前の二倍に騰貴してゐる際に、我國に於て十圓の金貨の重量を四匁に増加したならば、物價は、我國に於て少しも騰貴しないであらう。物價が一旦以前の二倍に騰貴したる後に、金貨の重量を増せば、物價は従前の平準を恢復するか或は其の平準の近くまで低落するに相違ない。従つて若し少しにても物價平準が上騰するの氣配を示したときに、直ちに金と紙幣との交換率をば其騰貴の程度に應じて變更せば、物價の著しき昇騰を豫防し得るのは明かである。兌換券制は此理に基きて案出せられたものであるが、此制度の長所とする所は金貨を流通せしめない點に存するのである。若し物價の騰貴又は低落する毎に量目の變更せられる金貨が流通してゐるとすれば、物價の高き時に發行せられたる量目の多き金貨は、物價が下落した際には、即ち金の價値が騰貴した場合には、海外に流出するか或は鎔解さるゝ虞れがある。然るに兌換券制度の下に於ては金貨は

一枚も發行せられず、兌換紙幣のみが流通するのであるから、金の價値が如何程騰落すればとて此弊害は毫も無い。而かも兌換券制の下に於ては流通が不換紙幣制の下に於けるが如く濫發される虞れが無い。何故となれば、政府の發行する紙幣に對しては、政府は兌換の義務を有してゐるからである。

尤も此兌換券制は決して完全無缺なる物價調節策と稱することが出来無い。其の缺點の一は不完全なる物價指數に依りて通貨の調節を行ふことである。其の二は物價の調節が一旦物價が多少の變動を呈した後に行はれるものであるとに外なら無い。其の三としては外國爲替相場が頻繁に變動することを擧げ得る。然しながら物價の激變を豫防するには充分であつて、物價安定の方策として今日迄に案出せられたものの中には此制度に勝る調節策は無い。

以上は一般物價を安定せしむる方法に關する提案の最も重要なものゝ説明であるが、最後に特種貨物の市價を安定せしむる爲めに採用され來つた政策の中に於て最も代表的と稱され得る調節策に就きて簡單に設述して置かうと思ふ。それは外ても無い、米價の調節である。米穀は上述の如く我國に於ける最重要の食料

品であるから、常に其の生産を維持するの必要がある。而かも其の生産を獎勵するには先づ米價をして相當の標準を維持せしめなければならぬ。米價が若し生産費以下に低落するが如きことあらば、農家は市場に供給する目的を以ては米田の耕作を躊躇するに相違ない。尤も米價を高く維持するよりも、生産費の輕減を計ることを以て食料品問題の根本的解決と看做さなければならぬ。然るに人口の膨脹に伴ひ、米穀に對する需用の増加するに連れて所謂收穫遞減の法則が働くが爲めに、米の生産費を節約するは容易の業では無い。殊に農民の間には比較的知識の程度の低き者が少くないので、農具の改良耕耘の改善經濟的經營に關する獎勵は急速に効果を擧げ難い。従つて米穀生産費の輕減は徐ろに之が實現を計り得るに過ぎ無いのである。然るに他の農作物と同じく、米穀は天候の影響を受け、年に依りて其の産額に著しき等差を生ずる。従つて豊作の年には米價暴落し凶作の年には騰貴するのである。而かも米價が暴落すれば、農家は翌年の植付に際し資本と勞力との投入を節約する結果として産額が著しく減退し、米價が暴騰するの虞れがある。加之、米價の暴落は農家の收入を激減せしめ、其の購買力の收

縮を誘致する爲めに、國民經濟が一般に沈衰するに至るのである。又、之に反して米價が騰貴せば、農氏の所得は膨脹するも、都會の細民は生活難に襲はれ、暴動を惹起することすらある。従つて米價の激變は、騰貴にせよ、低落にせよ、之を豫防するを得策なりと考へる者が尠く無い。舊幕時代にも大小の諸藩が常平倉なるものを置き、米價の安き時には米穀を買入れ、之を貯藏し、騰貴した時に之を庶民に拂渡したのである。明治政府も一度常平倉を置き、米價の調節を試みたことあるも、大なる效を果さなかつたので廢止したが、目下農商務省では食糧局なるものを置き、安價のとき米穀を買入れ、騰貴の趨勢を呈したるときに之を拂下げ、以て米價の激變を豫防せんとしてゐる。

常平倉若しくは類似の制度を以て重要商品の市價を安定せしむるは拙劣なる方法ではあるが、物價調節策としては有効的なるものゝ一に數へねばならぬ。極端に云へば、若し夫れに要する資本並に經費に制限をさへ加へねば、市價を殆んど絶體に安定せしむることが出来る。止むを得ずば、一旦生産量を全部政府に買上げ、之をば一定の相場にて民間に隨時拂下げれば宜いのである。

第四節 特種物價調節の可否

第二節に於て物價は人爲的に調節し得るものであることを明かにし、且つ第三節にて今日まで諸國に於て實施され來つた重要な調節策及び學者並に實務家に依りて提唱された調節案の概要を紹介したが、最後に吾人は物價を人爲的に調節するの當否に就きて研究を試みねばならぬ。何故となれば物價は人爲的に調節するを得るものであり、且つ諸國に於て之を實際に調節した前例があるとしても夫れに依りて直ちに物價を調節することを得策なりと斷定するを許さないからである。又假りに物價の人爲的調節を不得策を看做すこと能はざる場合に於ても、夫れには自ら程度があらねばならぬ。されば本節以下に於て物價調節の可否に就き聊か論述したのであるが、便宜上本節にては特種貨物の市價調節の可否を討究し、次節に於て一般物價調節の當否に論及しやうと思ふ。

抑も我國に於ける米穀魚類等の如き、又西洋に於ける小麥、肉類等の如き生活必需品に在りては時として政府が其の市價を調節しなければならぬことがある。

其必要の生ずるのは主もに平時に於ける凶作と戦争の場合に外なら無い。穀物が不作なれば、穀價は收穫の減量よりも遙かに高き率を以て騰貴するを常としてゐる。尤も小麦は今日國際的貨物たるの性質を備へてゐる結果として、凶作の爲め收穫の激減した國は他國より其の供給を迎ぎて不足額を補充することが出来るのであるから、收穫の減退の誘致する穀價の暴騰を多少緩和することを得るが我國の米穀の如く國內に於て消費さるゝものは自國産たることを要する食料品に在りては、若し自然の成行に任せなば、凶作年に於ける市價は法外に奔騰するの虞れがある。又、戦時中には食料品のみならず、被服及び其他の日用品に至るまで暴騰するの傾向がある。斯くの如く凶作年に於て食料品の市價が暴騰するのは勿論主として供給が減退した爲めであつて、戦時中に諸種貨物の相場が奔騰する主なる原因が政府の買上に存してゐるのは云ふまでもない。然しながら原因は夫れ丈けてはないのである。凶作の場合に於ても又戦時中にも物價が狂騰するの傾向を有するは需用が増加すると同時に供給が減退するに基因するのである。需用には(一)消費を目的とするものと、(二)營利を目的とするものと、(三)投機を目的とするものとがあつて、凶作の場合には消費を目的とする需用も、營利を目的とする需用も増加しないが、投機を目的とする需用は激増する。何故かと云ふに、投機業者は穀價の暴騰を見越して穀物の買占を行ふからである。次に戦時中は如何と云ふに、三種の需用は全部増加する。即ち先づ第一に消費を目的とする需用が膨脹する。夫れは出征軍隊の爲めに行ふ政府の買上に基くは云ふまでも無い。次に營利を目的とする需用も増加する。何故かと云ふに、陸軍省に納入する爲めに御用商人の買収する食料品の數量が多くなるからである。最後に投機商は市價の騰貴を豫想して買占をなす結果として投機を目的とする需用も亦膨脹する。一方供給は如何と云ふに、凶作の年には生産額が絶體に減少してゐるのであるから、其の原因の爲め、既に供給が減退するの傾向を有してゐるのみならず、價格の騰貴を見越して、農民、普通商人並に投機商が賣惜みをなす結果として、供給が著しく減少する。又戦争中は生産が必ずしも減退せざるも、賣惜みが行はるゝ爲めに、市場に於ける供給が收縮するのである。

斯くの如く、凶作と戦争とは縦令賣惜み又は買占等の如き事情がないとしても

需用を膨脹せしめ(戰時中)或は供給を減退せしむる(凶作)ものであるから、縦合投機業者の活躍がないとしても、市價は當然騰貴す可きであるが、賣惜みと買占が其趨勢を大に助長するのは勿論である。而かも此賣惜と買占は其の結果の如何に拘らず、動機に於て頗る卑劣なる、行爲であるから、市價に及ぼす悪影響の程度を論ぜず、當然政府は於て取締る可きであつて、況して細民の健康を危くするの傾向を有してゐるから、容赦なく之に嚴重なる制裁を加へ、食料品の暴騰を豫防せなければならぬ。

凶年と戦争との場合に物價を調節するの必要あるは前述の如くであるが、是れに準ずる事情の下に於ても、例へば大地震、海嘯、大洪水等の天災地變に際して食料品の配給組織が一時破壊せられたときにも、地方的に或は全國一般に物價調節を實施するの必要を生ずることあるは言ふまでも無い。然しながら、斯くの如き非常の場合を除きては、物價を成る可く自然の成行に放任するを得策とする。其の理由の一は物價が自然的に調節さるゝものなるの事情に外ならない。前章に於て明かにして置いた如く、或る貨物の市價が騰貴すれば其の需用が幾分か減退

すると同時に供給が増加するの傾向を有してゐるから、市價は自然に調節せられるのである。従つて市價の騰貴は若し其の成行に放任せば、消費を節約せしめ且つ生産を刺激するの作用を有してゐるものであると云へる。然るに假りに或る貨物が騰貴するの氣配を示した際に、政府が人為的に其の市價を調節したとすれば、消費の節約と生産の膨脹とを阻止するの結果を呈する。例へば米作が不良と云ふ程にはあらねど、稍々不充分である爲めに、米價が少しく騰貴するの傾向を呈した際に、若し政府が最高價格の公定或は其他の方法を以て米價騰貴の趨勢を挫折せしめたとすれば、世人は米價が何等の制限を加へられずして自然的に騰貴した場合に於るよりも多量の米穀を消費するのみならず、又一方に於ては農夫も亦生産を手控へるから、米穀は益々不足することになる。

斯くの如く物價は自然に調節されるものであるから、特種の場合を除き何等不自然なる干渉を加ふるの必要なのみならず、物價の人為的調節は夫れに依りて利益を蒙る者の獨立の精神を傷ける虞れがある。或る一貨物の市價が低落したときに、政府が之が引上を計れば、其貨物の供給者は喜ぶに相違ないが、斯くの如き

政策は當業者の依頼心を助長せしめ、獨力を以て事業を經營するの決心と勇氣を沮喪せしめる。又消費者に就きて云ふも同様であつて、多量に消費する或る貨物の市價が騰貴する毎に、政府が救済策を講ずるとすれば、消費者は之に忤れて常に收支上に多少の餘裕を生ぜしめ、置くの必要を忘却せしむるの結果を呈することになる。即ち物價の人爲的調節は國民の經濟的抵抗力を微弱ならしめるものである。人は自己の經驗に依りて寒暖に處するの道を知つてゐるが故に普通の體質を備へたる者は或る範圍内に於ける氣候の變化に對して充分なる抵抗力を有してゐるが、假りに政府が寒暖計の昇降する毎に國民に對して冷風を無料にて供給するか、或は一步を進めて何等かの方法に依りて氣候の變動を豫防し、春夏秋冬の區別なからしめたとするならば、國民の體質は寒暑に對する調節力をひて柔弱なものになつて了ふであらう。氣候が年中温暖であつて病人の轉地療養に適する布哇に永住すると却つて虛弱になる虞れがあると云はれてゐる。經濟的抵抗力も亦同一であつて、政府が餘りに人民に保護を加ふるは宜しくない。

又、價格の高い物品は輸出が困難であるとの説もあるが、貨物の輸出は價格が低

いから行はれるものでなくして、第一外國に於て夫れに對する需用があり、且つ內國品が外國人の嗜好又は必要を滿たし得るか否か、重要な問題である。日本は市價が高くとも印度又は米國の棉花、英米獨の鋼鐵、器械類を輸入しなければならぬ。又日本の蠶絲は價格の如何に拘らず常に多量に輸出される。獨逸の玩具が世界の市場を左右するのは價格が安い爲めよりも寧ろ精巧堅牢であるからである。若し價格の低いことが輸出増進の唯一の原因ならば、我國の玩具が戦後に於ける如く獨逸の競争品に依りて驅逐される筈がない。従つて輸出を盛んにするには賣價を安くするよりも寧ろ品質を改良するを得策とするのである。

第五節 一船物價調節の可否

前節に於ては特種物價調節の當否を略論したが、本節にては一般物價を調節するの可否如何を研究することにした。單に一般物價の調節と云ふも、前述の如く物價の人爲的引上もあれば、又引下もあるのみならず、物價をして常に一定の標準を維持せしむるの別がある。然しながら我國に於て常に社會一般の問題にな

るのは物價の引下に外ならないから、左には此意味に於ける調節の當否を略説することに定める。

日本に於て物價の人爲的引下の理由として挙げられてゐる主なるものは物價騰貴は(一)生活難の問題を惹起し(二)輸入超過を持続せしめ(三)正貨の流出を誘致すると云ふに存してゐる。勿論物價が騰貴すれば、萬人の生活費が増加するから生活が困難になると思ふは無理ならぬことであるが、支出が増加したとて収入が夫れ以上、或は少くとも同比例に膨脹すれば、生活上に何等の壓迫が加へられる譯が無い。前章に於て指摘して置いた如く、物價が一般的に騰貴すれば、企業家、企業に使役せらるゝ者、其他下級労働者の収入は物價騰貴の率に比例して或は夫れ以上に膨脹するが、官公吏、之に準ずる者及び高等職業に従事せる者の所得は物價騰貴と同時に及び同率には増加しない。物價騰貴の際に於ける生活難の問題は主として此等の階級に發生するのであるが、此等の階級に屬する者の収入と雖も後馳せながら物價の騰貴率に略ぼ比例して膨脹するを常としてゐる。彼等が生活に苦しむのは其膨脹が實現される迄の間に過ぎ無い。加之、彼等の全部は勤勞所得の

に依りて衣食してゐるのでは無く、其の一部分は財産を有してゐるから、物價騰貴の爲めに大なる苦痛を受け無い。又、彼等は所謂知識階級に屬する者であつて、高き収入を望んで現在の職業に就いたのでない。従つて間々多少生活に苦しむことは固より覺悟してゐるに相違あるまい。否な或る程度の生活難は人をして現在の地位に甘んぜず向上發展の道を講ぜしむるに至るから、却つて一種の刺戟劑とも看做すことが出来る。

次に物價騰貴は貨物の輸入を増進すると同時に、輸出を減退せしむるの傾向を有するは勿論であるが、輸出入超過の關係は必ずしも物價の高低のみに依りて定まるものではない。世界に於て物價及び貨銀の最も高き米國は輸出超過國である。之に次ぐ英國は輸入超過國である。更に戦前之に次いだ獨逸は輸入超過國であつた。之に反して物價の低き支那は輸入超過國では無いか。然らば如何なる事情が輸出入超過の關係を定めるのであるか。曰く、其の一は國際間の貸借である。巨額の外債を起しつゝある國は輸入超過國たるを常としてゐる。支那及び戦前の我國は之に當つてゐる。之に反して外國に貸付を行ひつつある國の

貿易は輸出超過の状態を呈する。戦後の米國は夫れである。又、以前巨額の外資を輸入し、現在其の元利を支拂ひつゝある國も輸出超過國になる。戦前の米國は其の一例である。輸入超過を誘致する第二の原因としては海運の収入又は海外投資の収益を挙げ得る。英國、佛國並に戦前の獨逸は即ち其數例である。然らば我國は如何と云ふに、一方に於ては巨額の外債を有してゐるが、又一方に於ては世界屈指の海運國であるのみならず、支那及び南洋に多額の資本を投じてゐるのであるから、輸出超過よりも寧ろ輸入超過を以て常態と看做す可きであるかも知れぬ。要するに、物價の低き國は輸出超過國となり、物價が騰貴すれば必ず輸入超過となるとの見解は誤つてゐる。従つて物價調節論の第三の論據たる正貨の流出に關する危惧も亦一片の杞憂たるに止まる。勿論或る程度以上の輸入超過が飽くまでも繼續すれば、正貨の全部が流出するかも知れ無い。然しながら、現今の状態では其の虞れは殆んど無いと云へる。

尙ほ此貿易問題に關聯して世人の一般に懷いてゐる謬見に就きて一言して置き度い。我國の物價は世界で最も高いと思ふてゐる人が尠くない。成程戦前に對する物價騰貴率を比較すると、我國の物價は最も著しく騰貴してゐる。世界經濟の標準と看做し得る英米兩國の物價と日本の物價とを對照するに、目下大正十二年八月英國の物價は戦前に此し、平均六割内外の騰貴を示し、米國の物價は三割内外昇騰してゐるに過ぎないにも拘らず、我國にては約十割方暴騰してゐるのである。我國の物價が世界の最高率を維持してゐるとの説は勿論主として此比較に論據を有してゐるのであるが、騰貴率が最も高いからとて、物價が最も高いと速断することは出来ない。少年の身長が青年の身長よりも速かに伸びる事實を以て直ちに少年は青年よりも身の丈けが高いを云ふを得無い。我國の物價は戦前英米及び其他の先進國に比して著しく低くかつた。然るに戦時中且つ戦後に於て、我國の物價の騰貴率が歐米諸國よりも高かつた爲めに、彼我の物價の開きが減じたのである。然らば何故に物價が斯く接近したかと云ふに、第一には我國の海外旅行者が戦後激増してた結果、西洋品の使用が頼みに増加し、第二には貨物の輸出入が一般に進増し、第三には我國國民經濟が發達して、經濟状態が餘程歐米諸國に接近し、殊に通貨が大に膨脹し、第三には奢侈が流行するに至つた爲めに外なら無

斯くの如く我國の物價は實際戰前に比して著しく騰貴してゐるが、其現象は前述の如く必ずしも恐るゝに足らざるものである。即ち物價の高きことは夫れ自身に於て弊害と看做す可きものでは無い。加之、物價の高率は幾多の利益を國民に與ふるものである。其の一は節約を奨励することに外なら無い。物價の騰貴せる際には人は皆な物資の消費に就きて従前よりも周到なる注意を加へて浪費を省くことに努めるを常としてゐる。此風習は總て生活の内容を改善するの結果を呈するとになる。物價の騰貴は次に生産を刺戟する。物價の騰貴しつゝある際に企業の利潤が増加するが爲めに、企業家は事業を擴張するのみならず、新たに生産業に従事する者が輩出し、其の結果として貨物の産額が膨脹する。従つて一方に於ては物價が高くなつてゐるも、又一方に於て収入も増加し且つ貨物の生産が豊富になつてゐるから、結局國民は物價の安かりし時よりも多量の貨物を消費若しくは使用することが出来る。

物價が一般的に騰貴してゐる際には原料及び賃銀も騰貴してゐるから、貨物の生産は減退すると考へてゐる者も尠くないが、是れは楯の片面のみを觀た認見たるに過ぎない。物價の高き時には生産費も夫れに應じて嵩むを常とするが、従前より經營されてゐる企業に於ける生産費は、物價が低位を保つて居つた時代の設備を利用し得るのであるから、生産費が物價程昂騰しない。是れが爲め企業利潤が増加し、且つ生産が刺戟せられるのである。

尤も賃銀の騰貴は企業の危険を一つ増すとになる。物價の騰貴が永續するものならば、賃銀の騰貴は企業家に何等の損失を醸すものでないが、物價は何日何時低落するに至るやも知れ無いのであつて、若し一朝下落したならば原料も安價になるが、賃銀をば直ちに物價の低落と同率に引下げ得ない事情がある。然しながら賃銀の騰貴は一面に於て國民經濟の發達に貢献する所が少くない。何故かと云ふに、賃銀の昂騰は企業家をして生産組織を改善し、勞力の節約を計ると同時に適當なる器械を益々廣く應用せしむるからである。分業、器械の利用、其の他凡て勞力節約の設備は世界で米國が最も發達してゐるが、是れは同國の賃銀が最も高いからである。

又、物價が高ければ、國際的經濟戰に敗けなければならぬと思惟せる者が少くない。成程物價が安ければ輸出が容易であり、高ければ、輸出が困難であるから、物價の高き國は一見國際的經濟競争上不利の地位に立ち、國民は物價の安き國に比して低度の低き生活に甘じなければならぬと思はれないでも無いが、事實は正反對であつて、例外は勿論あるが概して云へば、物價が高ければ高き丈け其國の文化が發達し、生活の程度も亦高く、物價が低くければ低き丈け國民の生活程度も亦低い。世界で最も物價の高い米國は現代的文化並に生活の程度に於て最も勝れてゐる。東洋に在りては我國の物價が最も高いが文化並に生活程度も最も高い。従つて物價の騰貴は一國の地位を高上せしむるの結果を呈するものであるとも云へる。少くとも物價の高きは憂ふるに足らざる現象であつて、要は國民が出來得る限り活動して、生産を盛んになし、貨物の供給を豊富にすれば宜いのである。

62
4/22

終

